

日本労働社会学会会員各位

日本労働社会学会通信 第21期 第4号 2008年12月2日(火)

日本労働社会学会事務局(第21期)

〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-4

横浜国立大学経営学部 小川 慎一(おがわ・しんいち)

Tel & Fax: 045-339-3767 E-mail: sogawa@ynu.ac.jp

学会HP: <http://www.jals.jp>

※事務局担当が笹原恵先生(静岡大学)から、小川慎一(横浜国立大学)へ引き継がれました。慣れない点もありご迷惑をかけることもありそうですが、よろしく申し上げます。

★会費納入★恐れ入りますが学会費の納入は、現金書留ではなく、下記の口座までお願いします。

【郵便振替口座】口座番号: 00150-1-85076 加入者名: 日本労働社会学会

【銀行振込口座】三菱東京UFJ銀行 浜田山出張所

口座番号: 普通預金 0411742 口座名: 日本労働社会学会 榎本環

◆年会費 学生・院生会員:6,000円 / 一般会員:10,000円

今後の日程:

1. 次回幹事会 2008年12月6日(土) 午後12時30分

拓殖大学(文京区、地下鉄・茗荷谷駅下車)D館6階第2会議室

2. 次回研究例会 2008年12月6日(土) 幹事会終了後

(午後15時30分開始予定)

拓殖大学(文京区、地下鉄・茗荷谷駅下車)D館6階第2会議室

報告者: 恵羅 さとみ 氏 (東北大学大学院文学研究科グローバルCOEフェロー)

タイトル: アメリカにおける労働運動と移民運動の交差

—ローカルな文脈における「非合法」移民組織化の経緯から

3. 第14回 関西労働社会学研究会 2008年12月20日(土) 午後13時—17時

佛教大学 11号館 2階会議室

第1報告:

梁京姫(立命館大学 非常勤講師)

テーマ: 非正規職関連法が女性労働市場に及ぼした影響

第2報告

Nelisa MLONYENI(ムロニェニ ネリッサ)(国立奈良女子大学社会生活環境学専攻博士後期課程)
テーマ:「専業主婦」という定義の曖昧さー社会学の視点からー

もくじ

I. マイケル・ブラヴォイ教授を囲む特別セミナー報告

I. マイケル・ブラヴォイ教授を囲む特別セミナー報告

「市場万能の時代における労働研究の可能性」に参加して

早稲田大学大学院文学研究科・小村由香

2008年11月24日(月)12時より明治大学駿河台キャンパスにおいて、マイケル・ブラヴォイ(Michael Burawoy)教授(カリフォルニア大学バークレー校)を迎え、「市場万能の時代における労働研究の可能性」と題したセミナーが開催された。前半は、ブラヴォイ教授のエスノグラフィーを回顧し、後半では市場万能主義の時代における労働研究の可能性について、教授作成による資料“The Ethnographer’s Curse: Labor Studies in the Era of Market Fundamentalism”にそってお話があった。

ブラヴォイ教授は、ザンビアでの銅産業、アメリカ・シカゴでの農業機械メーカーにおける労働研究、そして1980年代、90年代に社会主義が激変する時代のハンガリーとロシアにおける労働研究まで、30余年にわたる研究活動を振り返り、エスノグラファーとして大きな誤りを犯したという。資料のタイトルにある「エスノグラファーの呪い」(The Ethnographer’s Curse)とは、エスノグラファーがフィールドに呪いをかけることではなく(実際には、ブラヴォイ教授がフィールドを去るやいなや、経済的な衰退といった様々な災いが生じたという)、エスノグラファーが犯してしまう誤りに関わることを指している。教授は、ホワイトボードに記されたこれまでの自身によるエスノグラフィーの研究史に大きく×印をしたのである。これには正直いって驚いた。

ブラヴォイ教授がいう誤りとは、第1にエスノグラファーがフィールドの外側にある世界を射程に入れないこと、あるいは外部の世界を同質的、固定的なものだと捉えてしまうこと、第2にフィールドを永久に同じ状態であると想定し、そのフィールドの状態を歴史の出発点ではなく終結点として捉えてしまうようなフィールドの扱い方に関する誤信、第3に研究者自身の見方を調査対象の行為者に投影し、希望的観測をしてしまうという問題を指す。

つまり、グローバル化が進む時代にあっては、労働研究をするにあたり、調査対象となっている企業やその工場内といったフィールドを見るだけでは不十分であり、対象フィールドと外部との関係や歴史的な変化をも視野に入れることが重要であるということだ。

ブラヴォイ教授が行ってきた研究においては、マルクスが描いたような搾取の経験のもとに労働者階級が団結し、労働者が主体となる社会変革という予想を裏切ったという。グローバル化のもと高度に発達した市場化のもとでは、労働を搾取ではなく、カール・ポランニーが『大転換』のなかで描いたような商品化という角度から考え、研究者の関心は生産から労働市場に、そして生産から社会的再生産へとシフトさせることで新たな可能性が広がってくるのだという。その証左のひとつに近年の労働運動の成功事

例をみると、労働組合が地域のコミュニティと協働したり、環境問題など他の社会運動と連携したりするなど、労働運動が広い意味の社会運動として機能していることを挙げた。

ブラヴォイ教授は、自身の研究を振り返り、ザンビア、アメリカ、ハンガリーの労働者研究では「とりつかれたように生産へ焦点を当てた」が、このような研究は社会的再生産の研究により増強されるべきで、現代の市場原理主義の時代にあっては、分析の焦点を搾取から商品化にシフトすることが有益であると主張した。

質疑応答でも、この搾取から商品化への転換についての議論が活発になされた。マルクスの搾取論のなかに既に商品化の議論が含意されていたのではないかと問いに、ブラヴォイ教授は、マルクスの言う生産領域での搾取はひとつの階級を作り出したが、今では工場の中で見えなくなっており、労働者は搾取を体験していないが、商品化は、実際に労働者にとって見えるものであると回答した。しかし、問題は搾取が見えるか・見えないか、直接的か間接的かということなのか、私には疑問が残った。というのも、搾取と商品化との違いが不明確であるため、搾取を商品化と言い直しているだけで、搾取の構造そのものは何も変わっていないのではないかと考えるためである。

たとえば労働者がゲームのように仕事を行い、経営側と労働者との交渉のなかで、搾取が見えにくくなり、労使間の闘争が先鋭化しなくなっていることが事実だとしても、実際には搾取は行われていると言えるのではないだろうか。また、労働者がモノのように扱われ、時給や日給いくらといったようにその労働が数値化されていると、商品化されていることを実感しやすいし、見えやすいだろう。しかし、それだからといって、搾取されていないとはいえない。私がブラヴォイ教授の話をも十分に理解しているのか自信はないが、搾取から商品化という後半部分の話題については、対象とする領域、職種、産業さらには多様な雇用形態も関連し、異なる水準の話が交錯しているために、いささか議論が散漫になってしまったような印象を受けた。

ブラヴォイ教授自身も、サービスセクターにおいては、労使関係だけでなく、顧客の存在があり、顧客はコミュニティの一員であり、労働力の再生産をする領域に属していることを勘案し、今後はサービスセクターの労働研究の重要性を示唆した。とはいえ、生産者たる労働者も、別の場面では他の産業の消費者（顧客）でもあり、生産領域から再生産領域にも目を向けることの意義は十分にあるとしても、生産領域の研究の重要性が失われるわけでもないと考えた。

こうした理論的な疑問もいくつか未解決のままであるが、また別の問題として、何人かの若手研究者からも質問が出たように、それでは今後どのように労働研究を行ったらよいのか、具体的な指針や方法論には触れられなかったことも残念であった。

だがこうした問題は労働研究を行う私たち一人ひとりも真剣に向き合って考えていかなければならない。そしてその答えはやはり私たちがフィールドとフィールドを取り囲む外部世界とを行き来しながら、模索していくしかないだろう。

ブラヴォイ教授は前日、仙台で行われた日本社会学会で世界社会学会副会長として講演を行い、本セミナー後は成田空港へ向かい帰国の途につかれた（アメリカへ帰国後、2日間の授業を行った後は、セミナーでの講演のためオランダへ向かう予定であるとうかがった）。

多忙を極めるブラヴォイ教授による3時間弱のセミナーは大変貴重な機会であり、1人1人の参加者に大きな知的刺激を与えたことはいままでもない。しかし贅沢を言えば、まだまだ議論は尽きず、もっと議論をしたい、このような機会を持ちたいと切に願うのでした。

今回のセミナーを企画して下さった京谷栄二教授(長野大学)・木本喜美子教授(一橋大学)ならびに通訳を務めて下さった鈴木玲先生(法政大学大原社会研究所)、主催団体(日本労働社会学会・一橋大学フェアレイバー研究教育センター・法政大学大原社会問題研究所・明治大学労働教育メディア研究センター)にも感謝いたします。

なお、ブラヴォイ教授による講演内容("The Ethnographer's Curse: Labor Studies in the Era of Market Fundamentalism")につきましては、次号の『労働社会学年報』に掲載される予定です。

(小村 由香)

注:Burawoy 教授の読みは、同セミナー前日に開催された日本社会学会大会での講演を踏まえ、教授による最もオリジナルな発音に近い「ブラヴォイ」で統一させていただきました。(小川 慎一)

以上